

『小説の神様』(2016年)

相沢 沙呼／著 講談社

僕は中学生の時に作家デビューしたが、「売れる本」が書けない。発表した作品は酷評されている。「売れる本とは」、「人気が出るためには」ということばかり意識して、からまわりするばかりだ。僕は小説が嫌いだ。そんな中、同年代の売れっ子作家、小余綾が転校してきた。小説を書く意味を見

失った僕に小余綾が言った言葉「あなたには小説の神様が見えないの?」。小説の神様って一体何なんだ。



『ふしぎ?なるほど!』

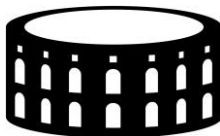
西洋美術たんけん 第1巻

ごらん! 神話と神さまの世界

(古代~16世紀)』(2014年)

池上 英洋／監修 日本図書センター

フランスのサント・フォア聖堂には、「タンパン」という石の彫刻があります。これにはキリスト教の神さまが、この世の終わりに行うとされる「最期の審判」の様子が表されています。地獄の怪物が、怖いけれどどこか愉快的な姿をしていて、とても興味深い作品です。この本には他にも、ヨーロッパなどで作られたすばらしい絵画・工芸・壁画などの作品がたくさん紹介されています。



『名画の謎 ギリシャ神話篇』(2015年)

中野 京子／著 文藝春秋

伝ピーテル・ブリューゲル作『イカロス墜落のある風景』は、一見のどかな美しい田舎の風景を描いた作品に見えます。しかし注意深く見てみると、画面右下に何やら穏やかでない様子が描かれています! 西洋名画の見方や、ギリシャ神話の神々の名前の意味まで、思わず「へえ!」と言ってしまうような情報もりだくさんの一冊です。読みやすい文庫本サイズですので、名画の数々を手の中でじっくりと味わってください。



『教養としてよむ世界の教典』(2016年)

中村 圭志／著 三省堂

この本では世界の教典のポイントをわかりやすくまとめています。第一部は仏典の世界について、第二部は聖書とコーランの世界について、第三部は世界のさまざまな教典について書かれています。また、各章立ての後ろにコラムがついていて、「釈迦の生涯」や「救済宗教の誕生」、「ユダヤ教の歴史」、「四福音書の構成」など、その章で述べたことの補足説明がされているので、より深く理解できるようになっています。



『四畳半神話大系』(2008年)

森見 登美彦／著 角川書店

大学3回生の主人公「私」は後悔していた。充実した大学生活を送るつもりだったのに、恋人もおらず、悪友に振り回されてばかり。不満だらけの生活を送っている。きっと入るサークルを間違えたのだ。入学直後に戻り、別のサークルに入り直し、人生をやり直したい…。

別のサークルに入った場合の大学生活が、4種類の並行世界として語られる。さて、「私」の望むキャンパスライフは、どの選択で得られるのだろうか?

『鈴の神さま』(2012年)

知野 みさき／著 ポプラ社

日本には八百万の神がいると言いますが、この本の鈴の神さまは、見た目5歳、実年齢千歳で野山を駆け回る無邪気な男の子です。春休みを利用して祖父の住む高野町にやってきた冬弥は、時代劇さながらの口調で祖父に会いに来る安那と友達になります。夏休みにも会いに来ると約束したものの、祖父が亡くなり冬弥自身も親の赴任でロンドンへ行くことになり、高野町から遠ざかります。安那が会う人たちの物語を3つ挟み、冬弥が約束を果たすまでが描かれています。

